

# 「伝え合い、学び合う力を高めよう！」

～子どもの学びをつなげる・広める・深める～

御所市立大正小学校

## ○ 推進校として実施した研究内容

### 1. 重点課題への取組状況

#### (1) 本校の重点課題

本校は、長年低学力傾向で、学習に集中しにくい子どもたちの姿があった。奈良県の国語・算数科の学力診断テストや全国学力・学習状況調査の結果より、学習面では基礎学力・読解力が低く、個人差が大きいことや、無解答が多く学習意欲が希薄なことがその一端として示されてきた。また、上記調査の児童質問紙より、基本的な生活習慣が身に付いておらず、規範意識も低いことが明らかになっていた。それらの山積する課題について、職員で話し合ったところ、教員の技量・子どもとの関係づくりを疑問視したり、子どもの生活実態や学習環境を課題に挙げたりする意見が出された。どのようにすれば、目の前の子どもたちに確かな学力を育てることができるのかについて、講師を招いて話し合う中で見えてきたものが「伝え合い・学び合う力」の育成である。

そこで、昨年度より「伝え合い、学び合う力を高めよう！～子どもの学びをつなげる・広める・深める～」を研究テーマに、一人一人の学びを保障するため、国語科を中心に学び合う授業の創造に取り組んできた。具体的には、ペアや少人数のグループで話し合う活動を積極的に取り入れ、個人の考えが変容したり課題の本質に迫ったりすることで思考力・判断力・表現力を高めようとしてきた。その結果、徐々にではあるが授業に取り組む子どもたちの姿勢に変化が見られるようになった。しかし、具体的数値として学力診断の結果が大幅に向上しているとはいえない。学年や項目によって厳しい課題が残る部分も多い。これは、話し合う活動を取り入れることで授業としては成立するようになったが、知識・理解に基づいて思考力・判断力・表現力を深めるような内容まで充実していない点と、授業者によって話し合い活動をはじめとする言語活動の捉え方、取り入れ方が違い、系統立っていないためだと考えられる。基礎基本の定着を図りながら、全ての学年・教科等の中で言語活動を充実させることが課題として残った。

今年度は、新学習指導要領にも示されているように、各教科等の授業において言語活動を充実させていくべく取組を進めてきた。特に、国語科においては、「話す・聞く能力」、算数科では「数学的な考え方」、理科では「科学的な思考・表現」、社会科では「社会的な思考・判断・表現」などの各評価規準に焦点を当てた授業づくりを目指してきた。それらをもとに、学校全体で効果的な授業方法を創造し、各学年・各教科を貫く言語活動（ペア・少人数でのグループでのきき合い）を活用した授業づくりに取り組んできた。



#### (2) 具体的な取組

##### ① 研究課題の共通認識を図る

「伝え合い、学び合う力を高めよう！～子どもの学びをつなげる・広める・深める～」

校内研修で、本年度の研究課題について共通認識を図った。

##### ② 教員一人一人が個人研究テーマの設定

(ア) 教員一人一人が1年間をかけて子どもたちとともに目指す授業のねらいを明確にする。

(イ) 具体的な手立て

校内授業研究テーマ・個人研究テーマを達成するための具体的な取組や手立てを、3点程度明確に決める。達成された場合は変更していく。

(ウ) 中間点検、総括

夏休みに中間点検を行い、具体的な手立ての確認・変更を行う。3学期に1年間の取組を総括していく。その際に、1年間、授業で実践してきたことを、実践報告としてまとめている。

##### ③ 新学習指導要領における「言語活動の充実」について、県教育委員会より山口指導主事を招いて研修を行った。(6月8日)

#### (3) 積極的に行う校内授業研究→学び合う授業づくり



#### (4) 本校が目指す「伝え合う授業づくり」

##### ①グループ・ペアの学習を組む

一人一人の学びを保障するために、グループ学習やペア学習を活用している。特に、全体の場では意見を出しにくい子の意見を出させるためにグループ学習を取り入れてきた。グループの活動では、一人一人が活動できなかつたり、参加できなかつたりする子が出ないように配慮し、メンバーの組み方を考えている。

また、グループとして意見や考え方をまとめることではなく、グループの仲間が関わり合うことを通して、個人の考えが変容したり課題の本質に迫ったりすることをねらっている。そのためにも、相手の考えも自分の考えも認め、受け止め合える人間関係づくりも重視している。

分からないことを出し、きき合える関係の上で、友達の疑問を解決しようとする働きかけによってグループのメンバーが言葉を理解していく。一つの疑問を追究し合えるからこそ、理解できたときに「分かった。」という言葉ではなく、次の疑問が口から出ると思われる。このようなグループの経験を積み重ねれば、解決しようとする働きかける子どもが増えていく。



##### ②きき合いで子どもをつなぐ

本来、子どもの疑問・課題であれば、学び合う仲間に向かって話され、伝え合い、きき合う活動へと結び付く。子ども同士がつながるためには、課題は子ども自身のものであることが大切である。また、教員が考えさせたい課題であっても、子どもに興味をもたせるように提示することで、子ども同士でつながり、深め合うことができる。

そのために、教員が一人一人の学びをとらえ、疑問や考えをつかみ、引き出していくことが重要である。また、子どもたちのつながりを支えられるように、教員自身がよいきき手になることや、座席の配置や目線、板書や発言のタイミング、本文の再読、言葉にこだわった読みなどへの配慮も、授業づくりの欠かせない要因である。

子どもたちは、全体できき合うことで、それぞれのグループできき合ったことを出し合いながら自分の考えを確かめることができる。似た意見・違う意見など考えたことを全体の場に出すことで、それをきいている友達に新たな視点をもたらすことができる。教員は、支援としてできるだけ子どもの意見をつなぐように心がけ、そのための声かけを意識して授業を行ってきた。



##### ③教員間の学び合いを高める

よりよい学び合える関係を築くには、教員一人一人が個人研究テーマを設定し、年間を通して日々の授業を見直さなければならない。自らの授業を公開する中で、仲間の教員や助言者にアドバイスをもらいながら、実践の反省・検討をしてきた。参観者は、授業者のテーマを踏まえ、子どもの動き、教材の課題、指導の展開等において、授業者が気付かない点を捉えて授業者に返すことを目指し、共に学んでいる。

また、それぞれ課題を抱えた子どもたちが、授業を通して学級の子もたちとどのように関わり、互いにどのように学び合っていたかを見合うことで、学校にいる全ての子どもへの理解を共有し、授業を通して生徒指導の在り方も学ぶことができる。現在、そのような相互作用を目指し、取り組んでいるところである。



#### (5) 確かな学力の育成に係る実践的調査研究 一学力向上実践研究一 研究発表会の開催

本校の「伝え合う授業づくり」の具体的な実践を公開することを通して、職員が一体となって取り組んでいる姿勢や子どもたちの学ぶ姿を見ていただくこと、外部からの忌憚のない意見をいただくことでさらに研究を深める糧とする思いをもって、昨年11月29日、研究発表会を県教育委員会・御所市教育委



員会共催で本校において開催した。約100名近くの参観者を得て、2時間の公開授業を設定し、全学級の授業公開（特別支援学級、専科授業も含めて）を行った。授業後には、「授業者と語る会」という形で、授業者が参加者と意見交流を行う。

## 2. 調査研究の成果及び今後の課題

### (1) 奈良県学力診断テスト結果から

表1 県平均との較差（国語）

	07	08	09	10	11	前年比
1年					-7.9	
2年				-18.9	-4.1	+14.8
3年			-10.0	+1.0	-15.9	-16.8
4年		-4.7	+9.5	+7.2	-3.0	-10.2
5年	-2.0	-1.3	-12.5	-4.6	-5.8	-1.2
6年	-5.0	-9.8	-10.1	-9.0	-1.9	+7.1

表2 県平均との較差（算数）

	07	08	09	10	11	前年比
1年					+2.4	
2年				-18.1	-3.7	+14.4
3年			-10.1	-1.4	-13.0	-11.6
4年		-4.6	+1.7	+4.9	-6.0	-10.9
5年	+0.8	-3.0	-5.8	-6.9	-20.5	-13.7
6年	-6.0	-14.4	-13.9	-19.0	-9.3	+9.7

#### <考察>

- 本校では、毎年、学力向上の取組の検証のため、奈良県国語科・算数科学力診断テストを実施し、結果を考察してきた。

昨年度は「伝え合い、学び合う力を高めよう！～子どもの読みをつなげる・広める・深める～」をテーマに、奈良県国語教育研究大会会場校として、国語科に絞った授業づくりを展開した。国語科の診断テスト結果で、前年度より県との較差を縮めた学年が増えているのはその成果であると考えられる。

- 今年度は、国語科においては、全ての学年で県平均を下回ったが、第2、6学年では前年度との較差を大きく縮めた。一方で第3、4学年で前年度県平均を上回っていたのが、マイナスに転じた。朝のびタイム（業前に行っている基礎学習）でも取り組んできている漢字の読み・書きといったところでは成果は見られる（学年によっては較差が大きいところもあるが）ものの、読むこと、書くことではまだまだ較差がある。

算数科においても同じようなことが言える。第1学年以外の学年が県平均を下回ったが、第2、6学年は国語と同様に前年度の較差を縮めている。一方で、第3～5学年で較差が逆に広がっている。

数学的思考力を問う設問で、第1学年を除いた全ての学年が県平均に比べると正答率が10～20ポイント低い。知識・技能に比べて明らかに思考力が弱いことが分かる。基礎基本

の定着も含め、「言語活動」を効果的に活用した教員の授業力向上が今後一層求められる。

- 無解答率について

国語の診断テストにおいて、無解答率を調査したところ、表4の結果になった。

読むことや言語事項の問題では、無解答率が低くなっている。問題に取り組む際に、しっかり考えて何とか解答を導き出す努力ができるようになってきている。一方、

表3 県学力診断テスト「数学的な考え方」正答率較差

	数と計算	数量関係	量と測定	図形
1年	8.0	3.7	3.7	
2年		-7.9	-9.1	
3年		-13.0		-19.9
4年	-12.3		-3.8	-6.9
5年	-17.0	-25.6	-24.4	
6年		-15.7	-14.2	

表4 県学力診断テスト（国語）

無解答率

	読むこと（説明的文章）	言語事項	書くこと
1・2年	0～5.1%	0～2.6%	10.3～12.8%
3・4年	0～15.9%	0～29.5%	15.6～29.5%
5・6年	0～12.7%	0～8.9%	17.8～32.7%

書くことに関しては、無解答率がどの学年でも高かった。今後は、自分なりに考えたことを話し合いで伝えるこれまでの取組に加え、書くことなど様々な表現方法を身に付けていけるような取組を考える必要がある。

## (2) 指導工夫の改善に関するアンケート結果から

- ① 「普段の授業で自分の考えを発表する機会が与えられているか」
- ② 「普段の授業では、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていると思うか」
- ③ 「授業で自分の考えを他の人に説明したり、文書で書いたりするのはむずかしい」  
※第1～3学年は「授業で自分の考えを説明するのはむずかしい」
- ④ 「授業中に先生の質問に答えたり、自分の考えや意見を言うのは好きか」

	設問①			設問②			設問③			設問④	
	10月	1月		10月	1月		10月	1月		10月	1月
1年	89.7	91.4	1年	92.3	94.3	1年	30.5	22.2	1年	89.7	91.6
2年	80.9	76.2	2年	83.3	81.6	2年	64.3	59.5	2年	73.8	64.3
3年	85.3	82.5	3年	90.7	89.8	3年	54.5	56.8	3年	63.8	54.5
4年	90.6	87.5	4年	94.1	100.0	4年	54.8	47.6	4年	60.0	80.9
5年	80.3	78.5	5年	80.5	73.3	5年	88.4	81.4	5年	33.3	25.6
6年	70.2	82.3	6年	78.9	80.5	6年	91.2	72.8	6年	33.3	40.0

### 〈考察〉

設問①については、ほぼ8割～9割の子どもが「自分の考えを発表する機会が与えられている」と答えている。一定の評価ができると捉えたい。設問②については、本校が大切にしている「ペア・グループ学習」「きき合い」に関わる設問であり、高学年がやや低いのが気になるが、ほぼ8割以上が肯定的に捉えている。設問③については、多くの学年で「自分の考えを説明したり、文章に書くことをむずかしい」と思っている子どもがまだまだ多い現状である。設問④については、低学年では「自分の考えや意見を伝えたい」という思いが強く、学年が上がるにつれて、低くなる傾向が見られる。低学年から自分の考えを友達や先生に伝えることの楽しさを体験させるとともに、高学年に進んでも自分の意見を伝えたいという意欲をもたせる工夫がさらに必要である。

### ○ 成果として

子どもたちについては、数年前に比べて格段に意欲的に授業に取り組む姿勢が多くみられるようになった。自分の考えを友だちに伝えることの楽しさを味わい、もっと聞きたい、伝えたいという意識も徐々に高まってきている。

昨年度までは、国語科に絞って取り組んでいたが、今年度より、様々な教科の中でもきき合う活動を取り入れたことで、自分の考えを伝える機会が増え、自然ときき合う活動に慣れることができた。授業時間が終わっても、互いに気になったところを話したり、教員に感想を伝えたりすることも多くなった。

高学年では、これまでテストでは、あきらめが早く、記述に取り組もうともしなかった子どももいたが、以前に比べ無解答が減りつつある。授業や行事などの感想を書く場面でも、最後の行まで書ききることが当然のことになってきた。

教員については、まず、授業に取り組む姿勢が大きく変わった。一方的に話し続ける授業が減り、教員自身がよいきき手として手本になるように意識してきた。授業の中でグループや全体できき合う時間を確保するように変わり、その結果、子どもたちが考えたり、学び合ったりして活動する時間も増えた。また、きき合いが成立するために必要な課題設定についても、教材研究に真摯に取り組むようになった。教員がきくことを意識し、話すトーンを抑えて語ることも実践されてきた。そして、子どもたちも落ち着いて話し、話す人の方に体を向けてきく姿勢もとれるようになってきた。

教員それぞれが、本校教育目標及び研究テーマを達成するための個人研究テーマを設定したことも有意義であった。個人のテーマを基に学年会で日々の授業について話す機会が増え、きき合いが進められたときの課題を共通理解することができた。教科が違っても子どもたちにとって少し難し

いと思われる課題を効果的に提示することで、より意欲をもってきき合えることも確認できた。

研究授業でも単なる褒め合いや問題点の指摘になることなく、子どもたちの学習の様子をビデオで確認しながら、教員の発問や子どもをつなぐ声かけ、つぶやきへの対応等について細かく意見を交流できた。授業者が気付いていなかったような子どものつぶやきや書き込みを、参観者から授業者へと伝え返していくことで、以後の取組に生かしていくことができた。このような機会を年間を通して多くとるために、授業案は略案として示し、教員一人が複数回授業を公開できるようにしている。

今年度開催した「学力向上実践研究発表会」においても、全学級授業公開を行った。教員全員で取り組んできた授業づくりを公開する場とすることができた。また、授業案を検討することで、教員間で様々な教科における課題設定や言語活動の取り入れ方について研修を深めることができた。

## ○ 今後の課題として

学び合う授業づくりを通して学校が変わってきたことを実感しつつも、全ての子どもが主体的に参加している授業が毎時間展開されているわけではない。さらに、きき合う内容を深めていくための課題づくり、書くことをはじめとする、話すこと・聞くこと以外の表現についても、教員の指導力を高める必要がある。

また、今年度、学年を中心に考えてきた授業を、低学年から高学年に系統立て、6年間で学びが向上していくように工夫していくことも必要である。

奈良県学力診断テストの結果を見ると、県との較差が縮まった学年もあったが、逆に開いた学年も見られた。これは、伝え合い、きき合う授業づくりの実践からようやく子どもたちが落ち着いて学習に取り組める環境が整ってきたものの、その基盤となる教員の授業力を高める必要があることを示している。今後、こうした研修も並行して行っていきたい。